学びの広場

2021 1月号

問 教育課 学校教育係 ☎(83)7023
生涯学習係 ☎(83)7021

令和元年11月・令和2年1月・2月号では小中学校の「校内研究」（教職員が自主的に取り組む研究）について紹介しました。今月号では、松田幼稚園の「園研究」について紹介します。

▼研究主題
『一人一人が夢中になって遊び、思いを実現していくためのカリキュラム編成』

『七つまでは神のうち』

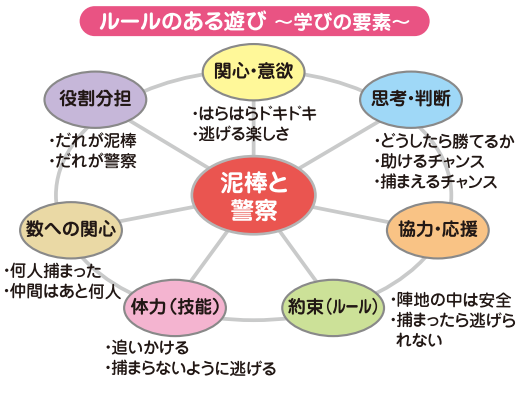
三歳の年少児が六月初めのアジサイの蕾を見て「ブロッコリ」とつぶやきました。知識を総動員してありのままを表現しています。このように天衣無縫の神様は、自然物、友達、興味関心等、具体的・直接的な体験を重ねながら幼児期を過ごします。

本園では鎌倉女子大学の真宮美奈子先生、白百合女子大学の椎橋げんき先生のご指導をいただき、表題のテーマで研究を進めています。「夢中になる」とは、一定時間（期間）一つの物事に没頭し楽しむことです。園庭にある花や葉を使っての色水作り、泥団子作り、野原での虫捕り、川遊び、運動会のプログラム作りなど、内容は多岐にわたります。

「思いを実現する」とは、したいできたい、上手になりたい、友達と一緒に完成させたい等の願いを叶えることです。そのために私たち教師は、一人一人の興味関心や思いを把握し、教材の特性を調べ、それらを元に遊びがどのように発展するのかを予測し、カリキュラムを編成します。没頭体験を実現できたのか、ねらいとした力は育ったのか、教師の支援方法や内容は適切だったのか検証し、研究を進めているところです。

1 学びの要素を吟味検討する

おにごっこ、フルーツバスケット、ボール当てゲームなど、ルール（約束）のある遊びには様々な学びの要素が内包されています。「どろけい」は寒い時期の定番の遊びで子どもたちに人気があります。検討したところ、図のように七つの要素が確認されました。子どもによっては逃げたり追いかけたりすることを楽しむ場合もあれば、泥棒に徹してひたすら逃げることに喜びを感じる子もいます。ルールの面白さを感得して、助言をしたり作戦を授けたりしながらドキドキ体験をする子も現れます。年長後半期になると逃げるのがゆっくりの子に合わせてルールを変え、勝敗のみならずみんなが楽しめる内容へとカスタマイズします。学びは個々それぞれですが、集団の合意形成を大切にしています。



2 適切な支援を的確にする

昨年開催した運動遊び発表会での年少組は、好きな子と一緒に走ることに重点を置きました。ねらいの一つは「思いを伝える」です。そのために「一緒に走ろう」「一緒にやろう」など、友達への言葉がけが必要となります。表現することが苦手な子には教師が支援します。

一方、年長組になると、鉄棒遊びを得意とする子が興味をもった子にコツを教え、学び合う姿がありました。できるようになりたい、できてほしいの思いは願いとなり、練習と応援に力が入ります。粘り強さ、協力、技能、回り方の知識、支えられている実感など、心身両面で様々な力を獲得しました。

教師間では「思いを伝える、仲間と関わるＴＰＯ（時・所・場合）」の重要性を再確認しているところです。

3 一人一人の思いを実現するカリキュラム編成

運動遊び発表会では、子どもの発想を活かしつつ教師のねらいを融合させたカリキュラムを作りました。5週間にわたる計画は一つの「案」であり、子どもたちの興味関心の変化を捉えながら見直しを繰り返し、個々の思いを集結した「海賊迷路」というプログラムを完成させました。見直すとは子どもを見つめ計画を修正することでした。

幼稚園教育での遊びは、道具（もの）が加わったり友達（人）と関わったり場を転換したりすることにより、新たな発想が生まれ発展し変化していきます。神様である子どもたちから学び、研究を進めています。

松田文化財探訪

続・町指定文化財とその周辺　その16

文化財保護委員　鈴木　一行

中尾農道に沿って（三）
桜観音②（十一面観音菩薩立像）

１９６８年に制定された松田町文化財保護条例に基づき、３年後に15点の文化財が町の指定を受けました。桜観音堂に安置されている十一面観音菩薩立像もそのひとつです。『松田町の指定文化財』（１９７３年発行）は、上下二段の台座に載った仏像の高さは１３４・５センチメートル、一木造で平安時代の作であるとしています。そして「眼は彫眼で頭部の方は老退化している部分がある。彫は一般に深彫りで、特に衣の褶の部分は深彫りで、彫痕が強くなっている。総体的に頭の大きさに比較して胴体が短いのが特徴である」と記しています。

その後、傷みが目立つようになったため、１９９０年に仏教造形研究所の本間紀男さんに修復を依頼しました。本間さんは東京芸術大学の彫刻科を卒業し、同校で教鞭を執った経験もある彫刻家で、かつ工学博士の資格も持つ仏像彫刻研究家でした。修復の結果、胎内仏や胎内墨書などは発見されなかったこと、平安末から鎌倉期の作であることなどがわかりました。なお、修復費は県・町・宝寿院の三者が均等に負担したとのことです。

また、同時期に鑑定してくださった鎌倉国宝館学芸員の山田泰弘さんは「一見、平安後期（11世紀）頃の作風ではあるが、型にはまらない個性的な表情、盛り上がった髪際部、両脚間や袖部の衣紋などには南北朝期（14世紀）頃の作風が窺える。平安仏にしても後世に幾度となく補修されているのであろうから年代の特定は難しい」と語っています（以上、藤井宝寿院住職より）。

最明寺（西明寺）を経て鎌倉に至る山道の麓の里に、この仏像がいつ祀られたかは不詳です。きっと多くの旅人がこの仏様に手を合わせたでしょう。でも、千年に渡って戦禍などから仏像を守ってきたのは庶子の人々なのです。しかも彼らは「誇り」を持って護持してきました。だから「私たちの観音様は、行基が奈良や鎌倉の長谷観音と同じ木材でつくった」という伝説（江戸期の『新編相模国風土記稿』に見える）を残したのです。

十一面観音菩薩立像